

図69 3号墳第2主体

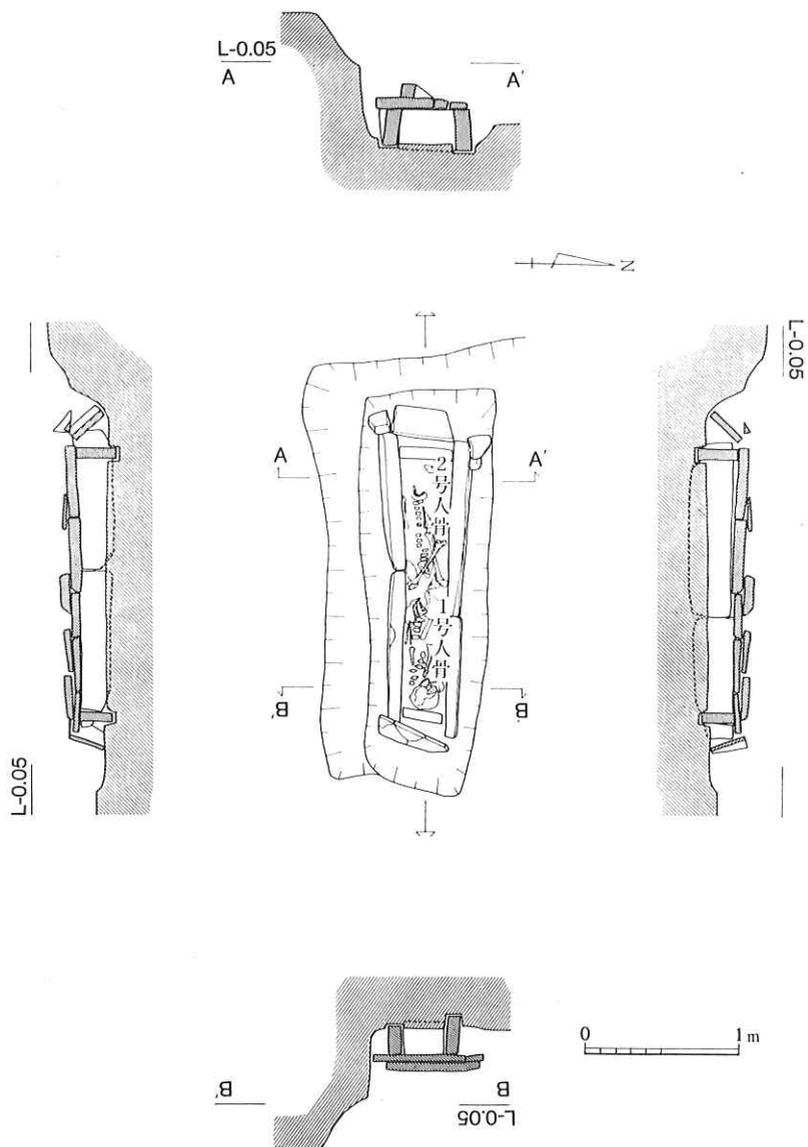


图70 3号墳第3主体

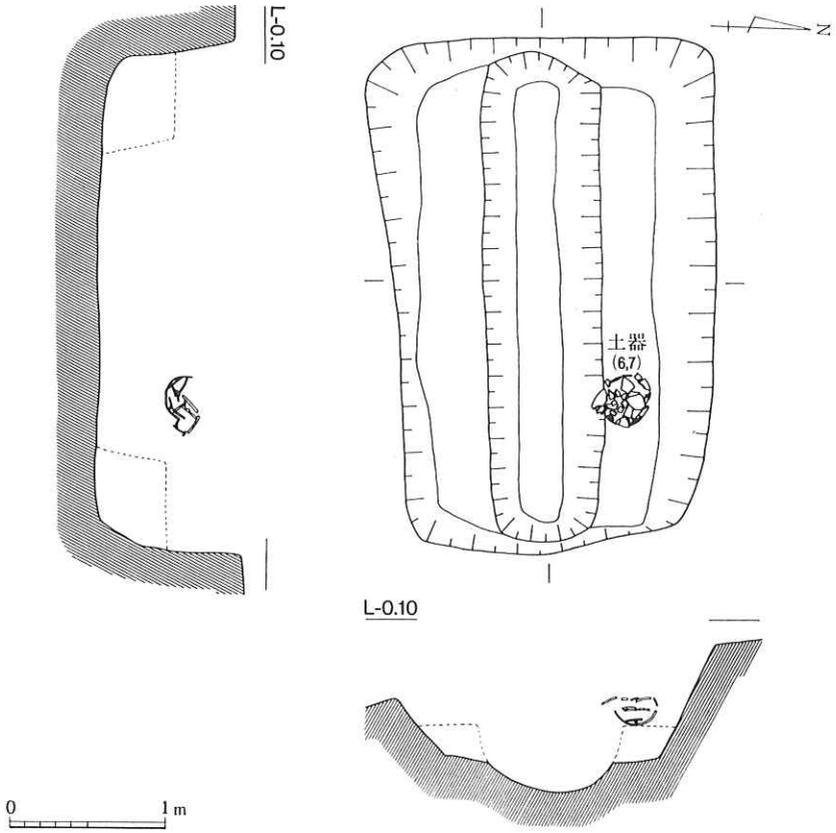


図71 3号墳第4主体

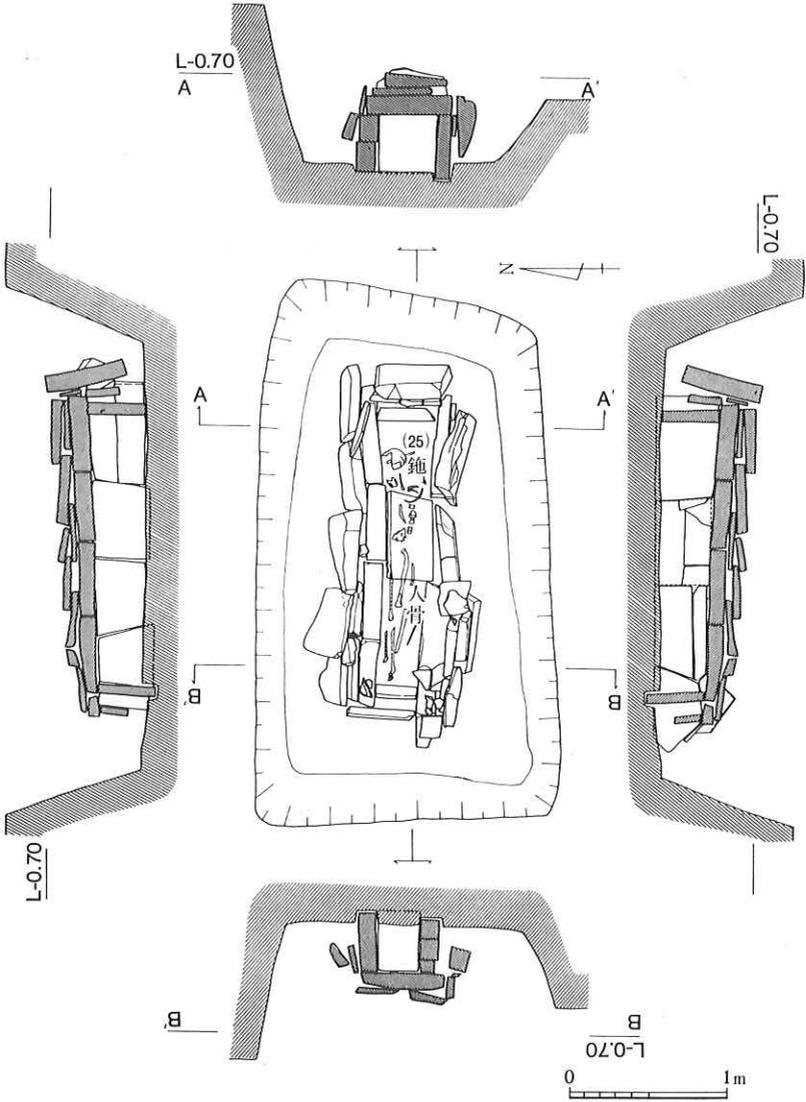


図72 3号墳第5主体

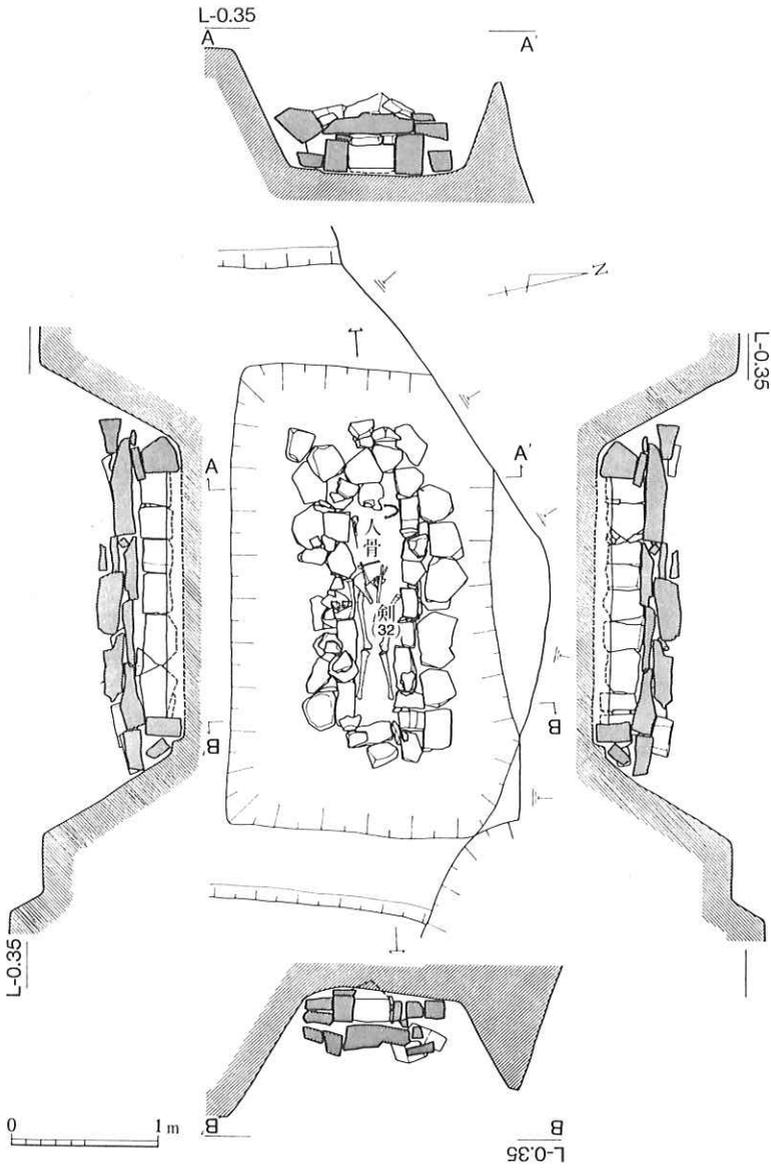


图73 3号墳第9主体

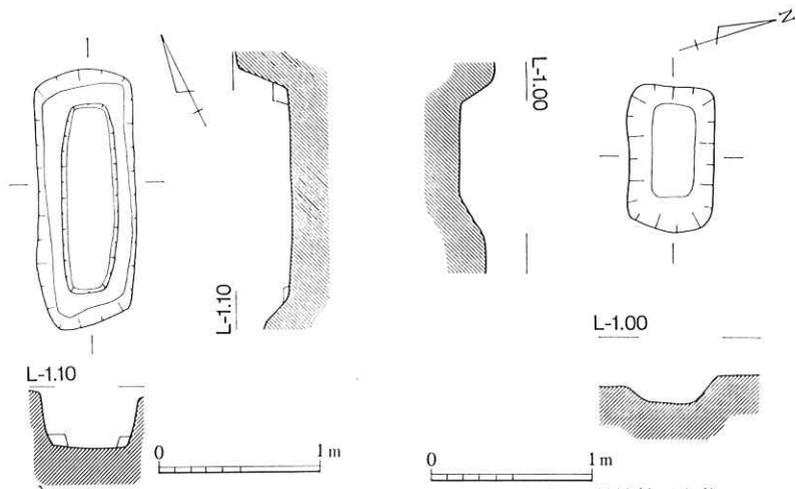


图74 3号墳第11主体

图75 3号墳第12主体

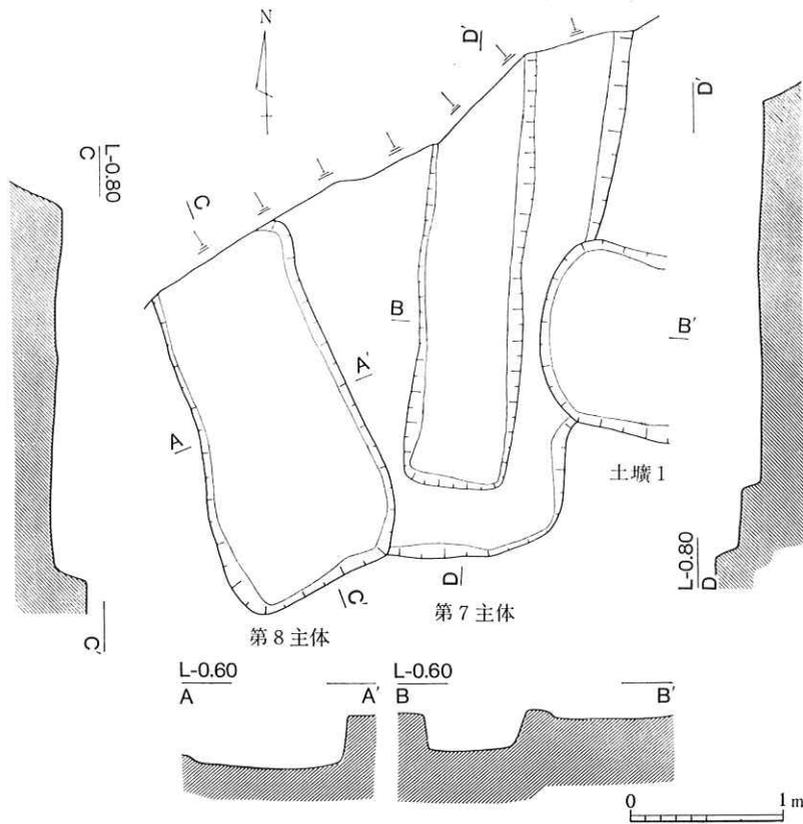


图76 3号墳第7・8主体

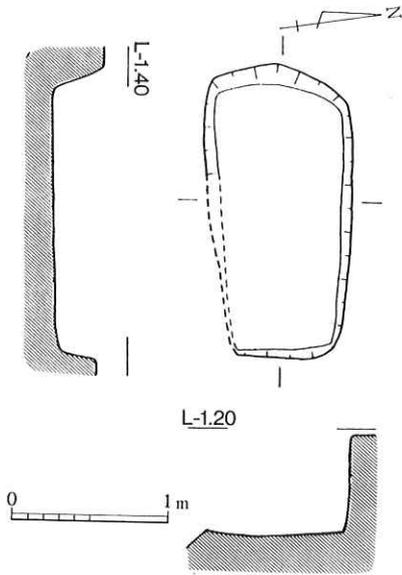


図77 3号墳第9主体

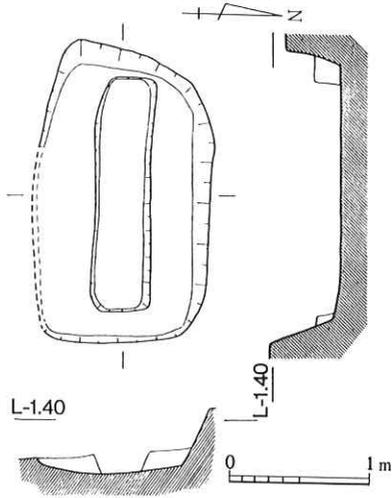


図78 3号墳第10主体

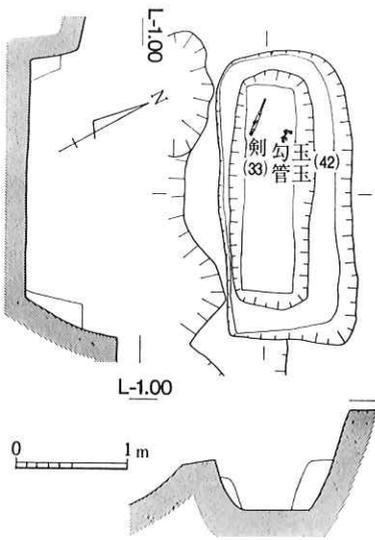


図79 3号墳第14主体

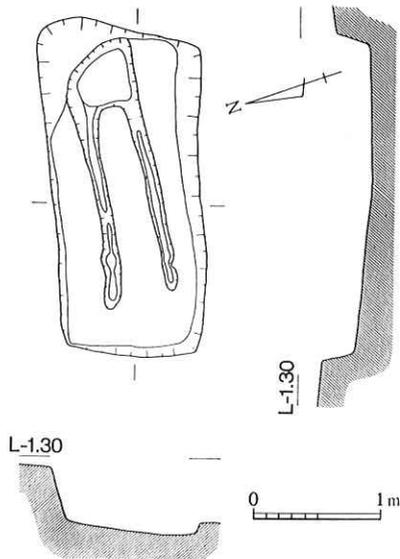


図80 3号墳第15主体

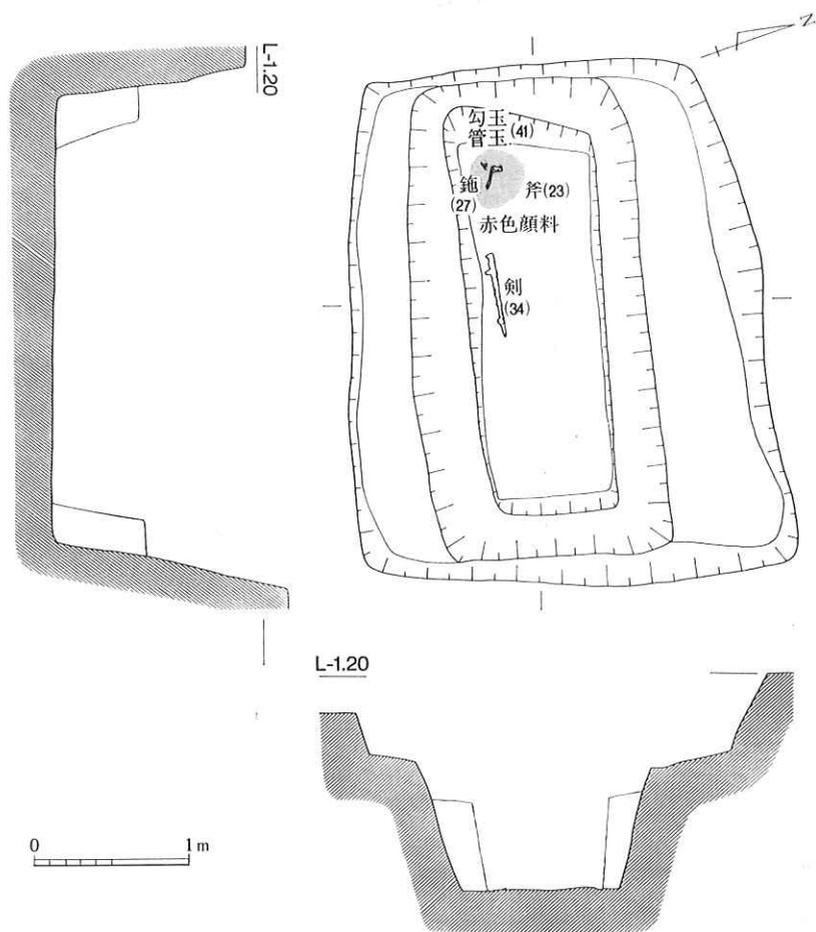


図81 3号墳第13主体

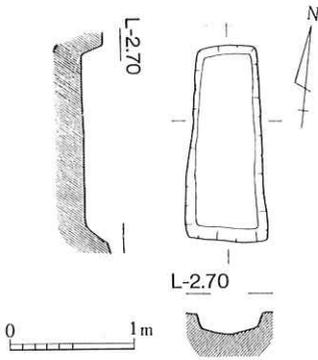


图82 4号墳第1主体

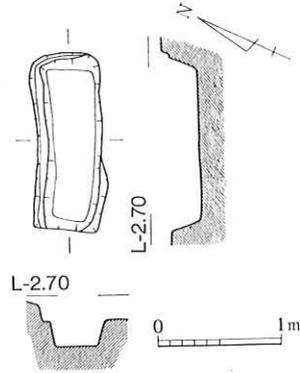


图83 4号墳第2主体

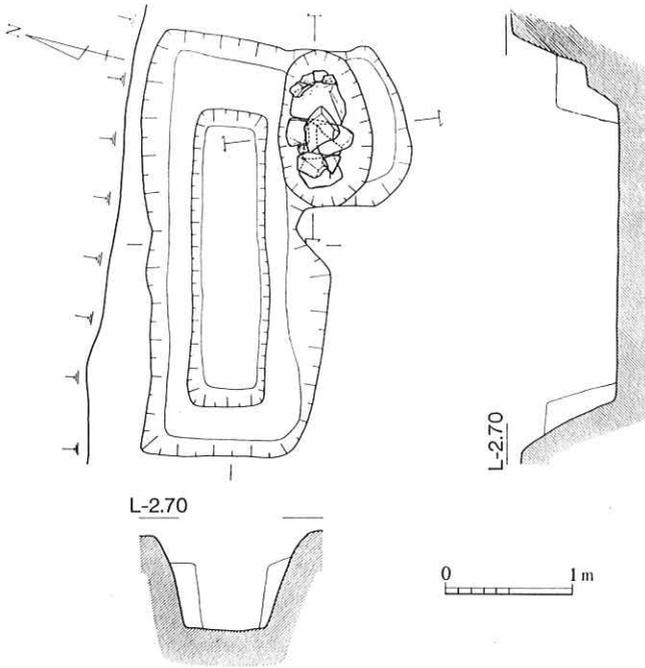


图84 4号墳第3・4主体

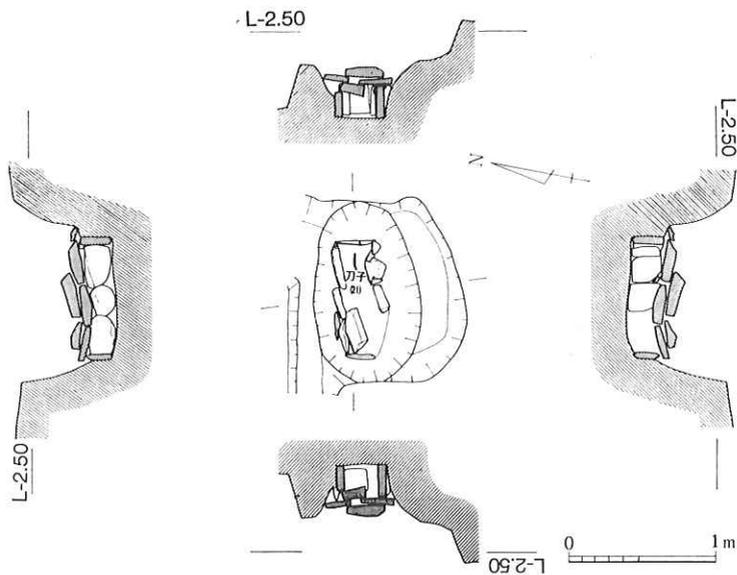


图85 4号墳第4主体

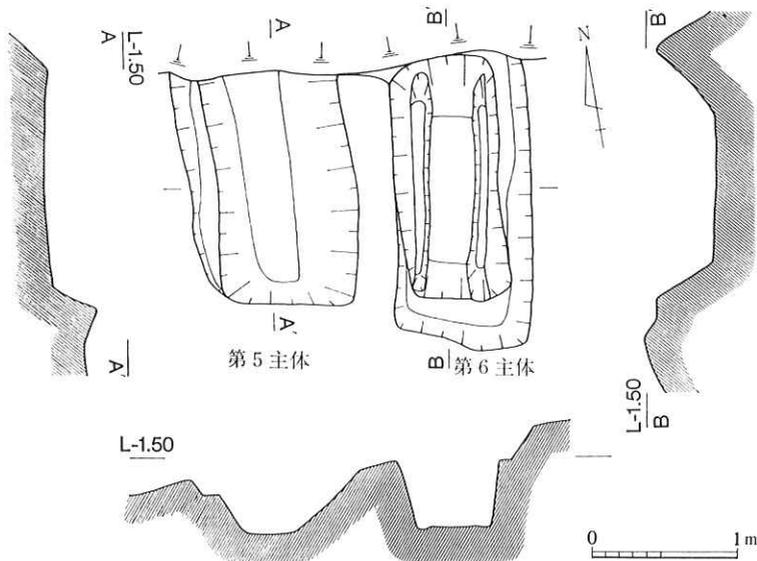


图86 4号墳第5・6主体

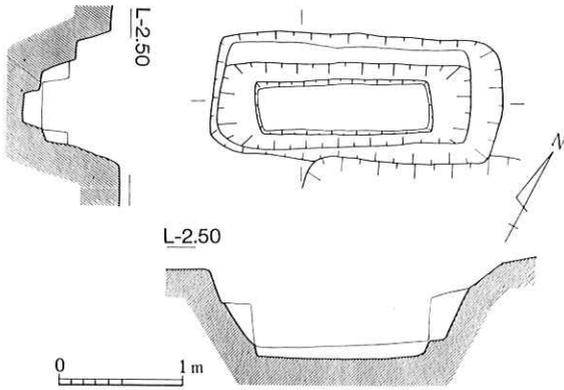


图87 5号墳第1主体

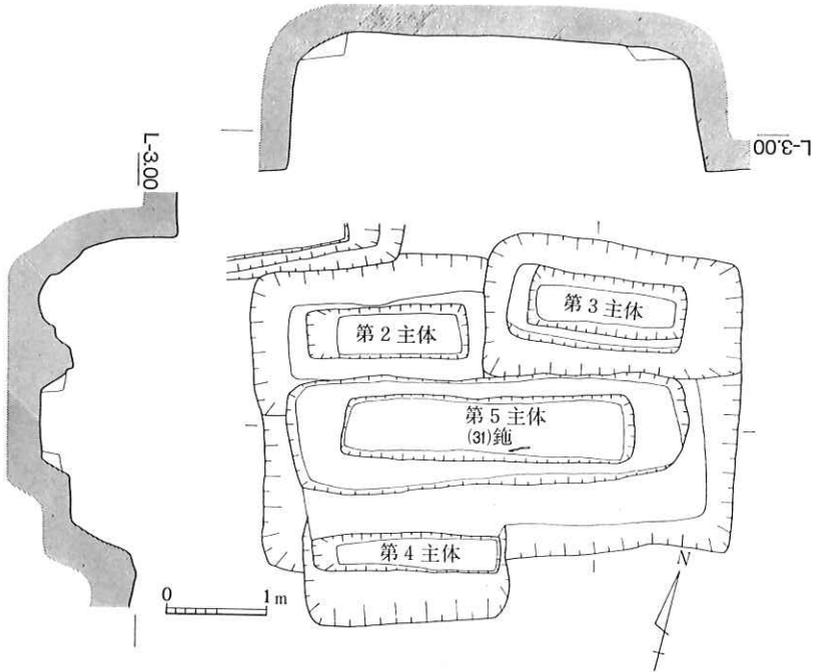


图88 5号墳第2~5主体

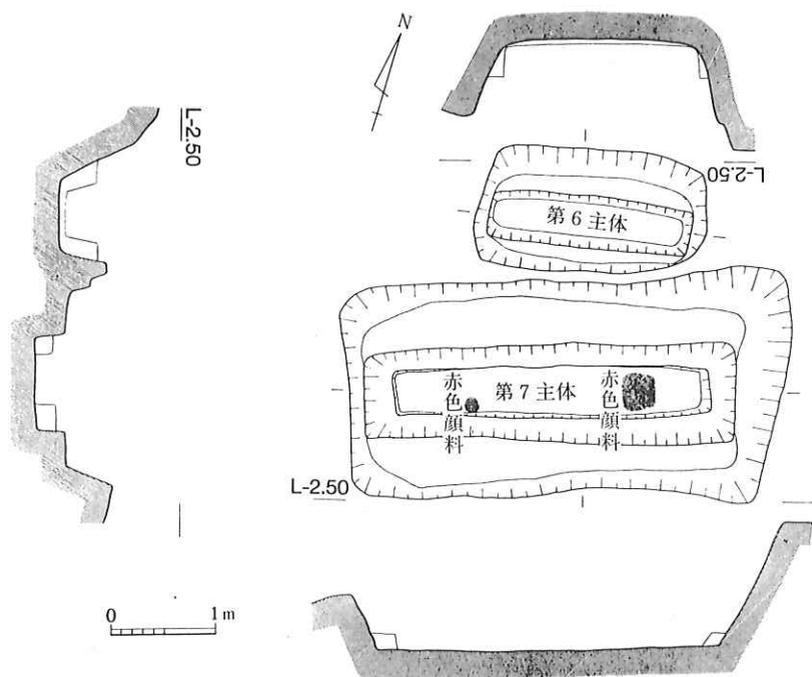


図89 5号墳第6・7主体

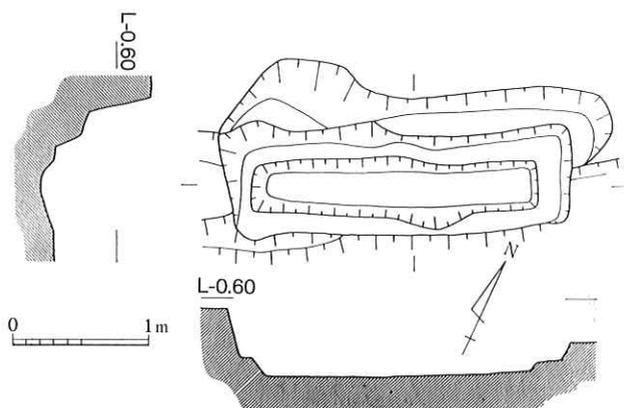


図90 6号墳第1主体

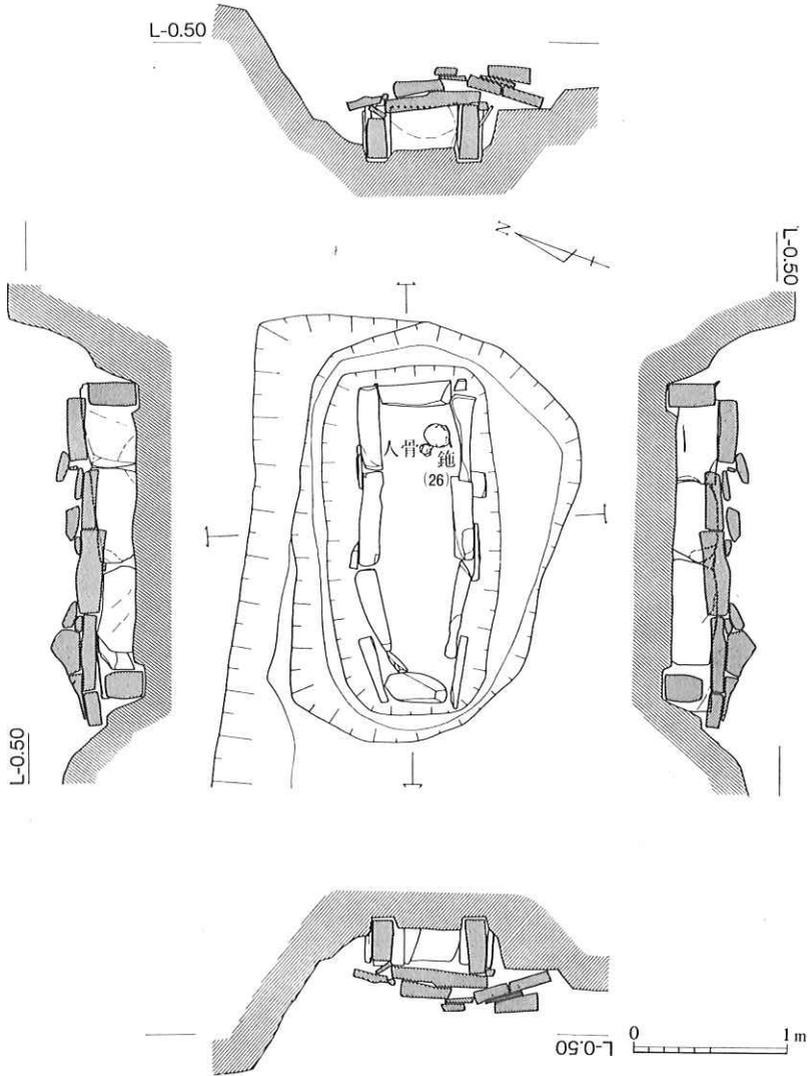


図91 6号墳第2主体

L-0.10

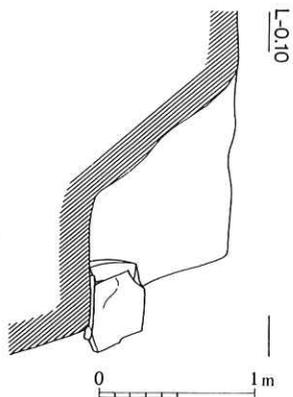
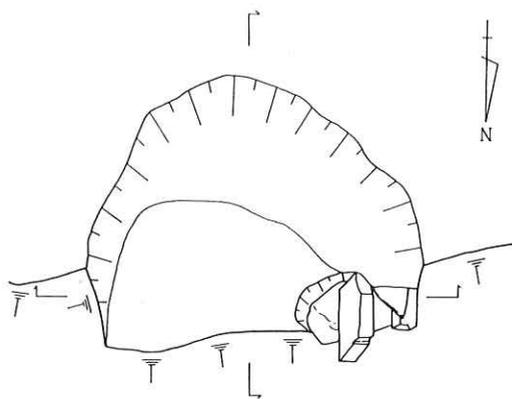
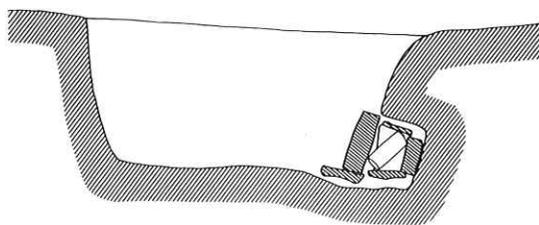


図92 1号経塚

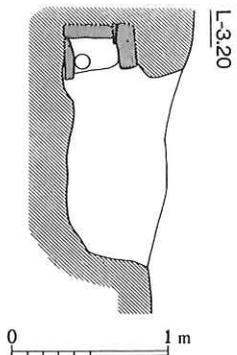
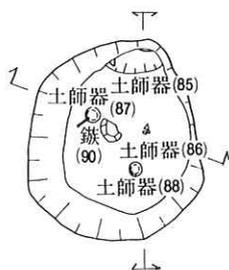
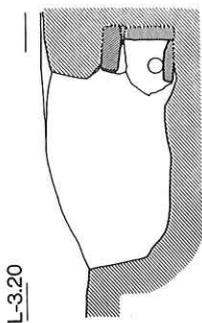


図93 2号経塚

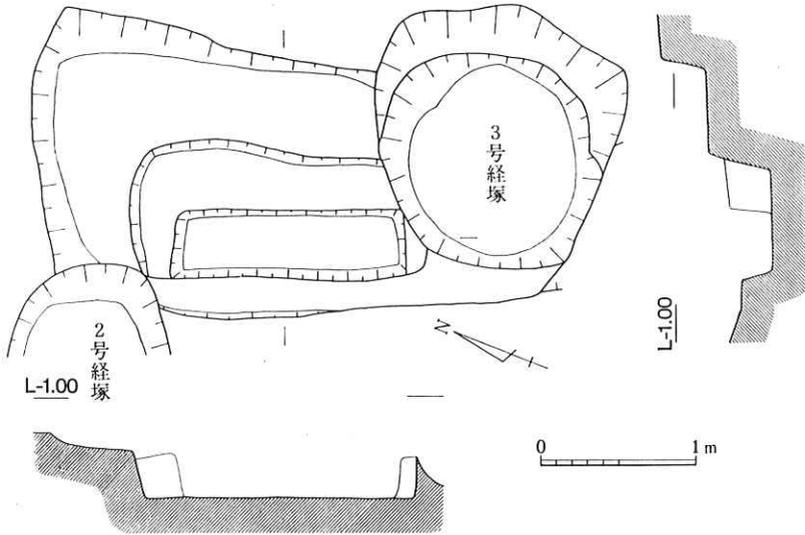


図94 2号経塚と3号経塚

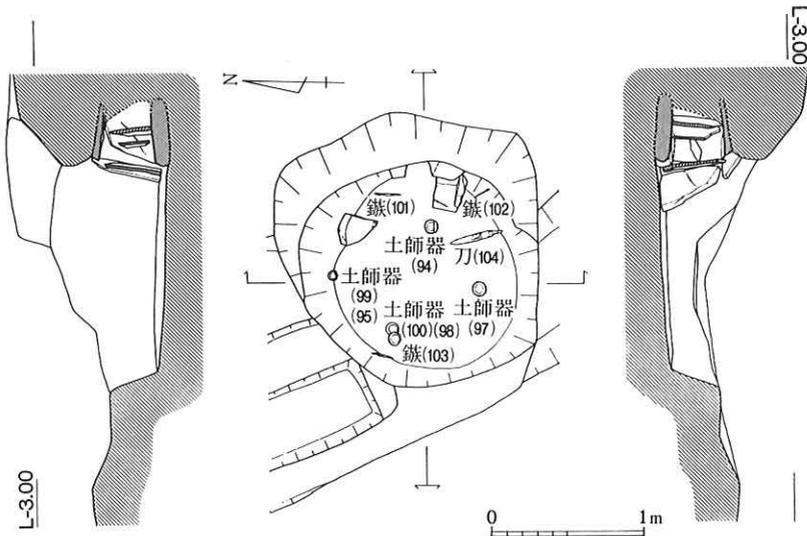


図95 3号経塚

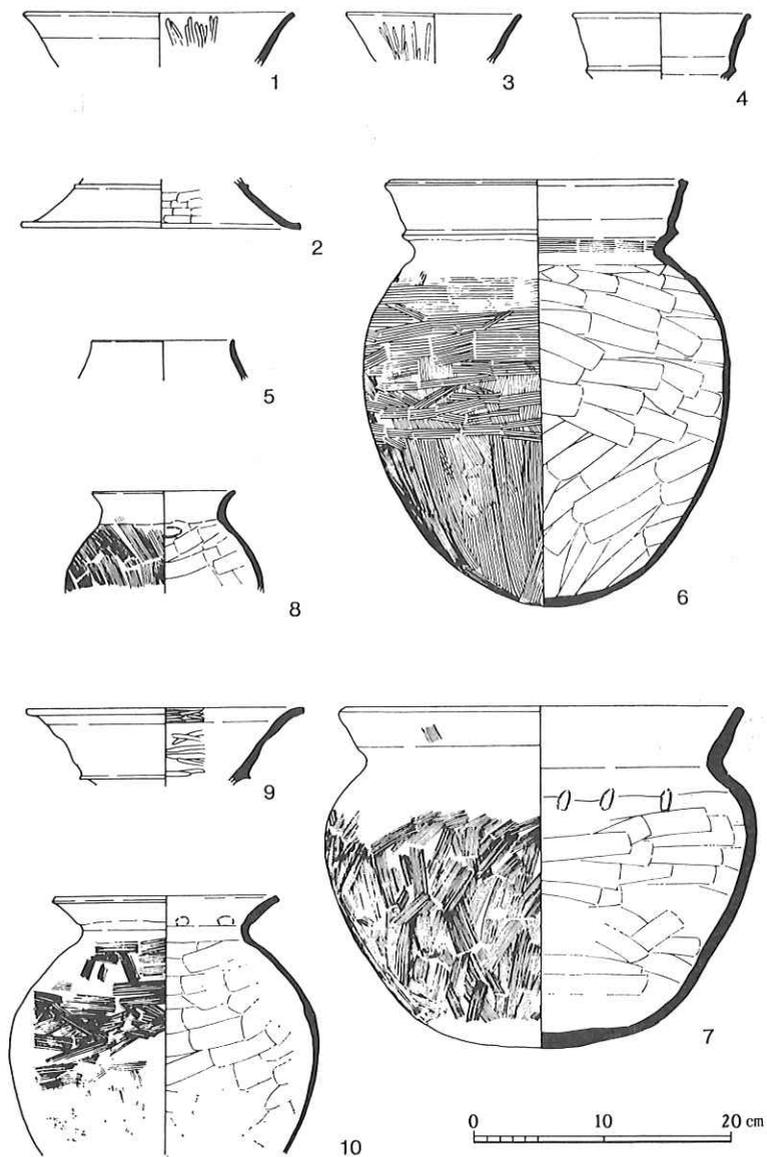


図96 土器

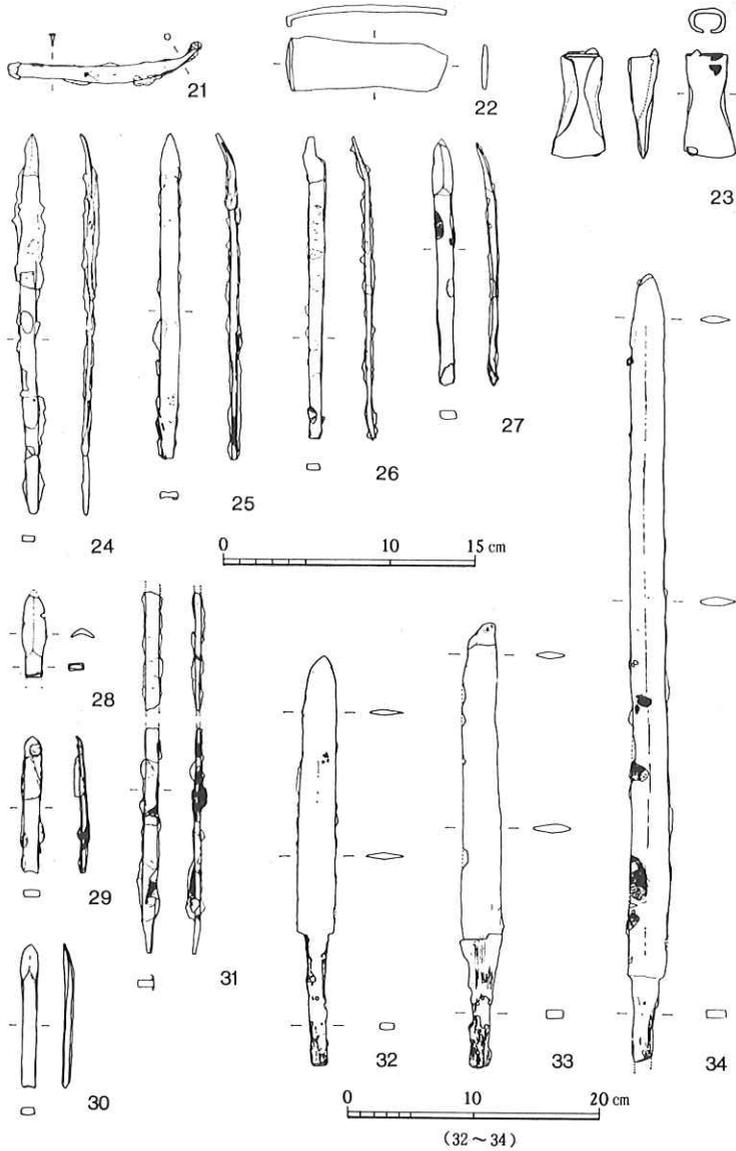


図97 鉄器

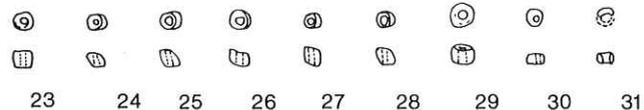
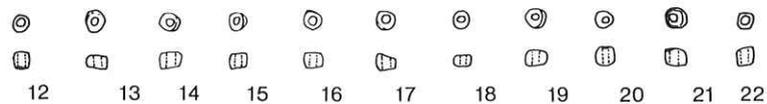
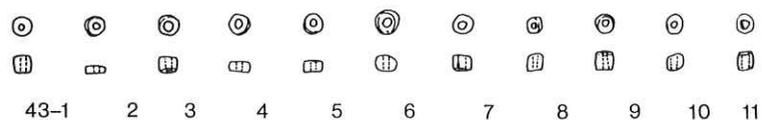
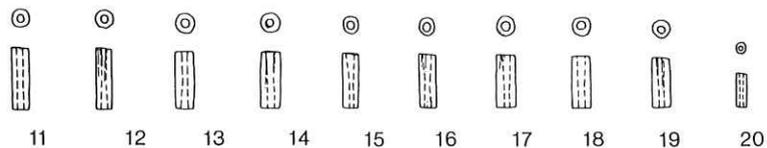
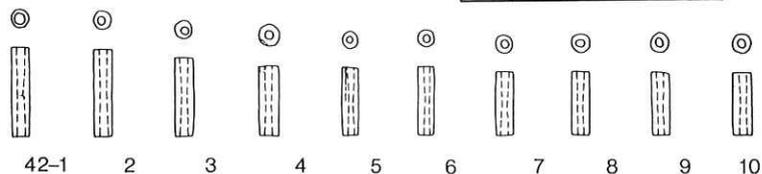
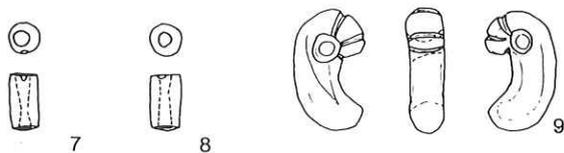
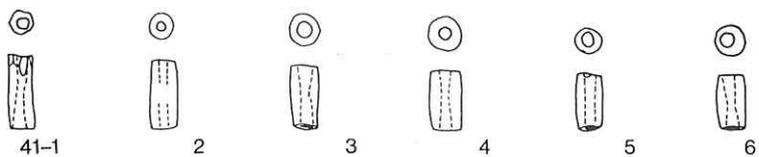
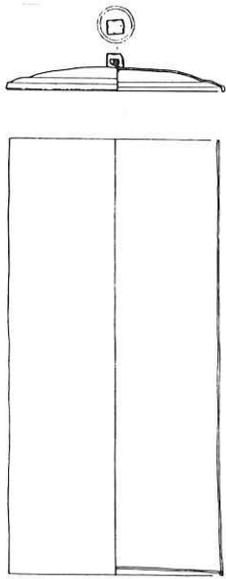
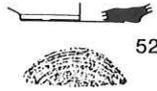


図98 玉

III 古墳時代



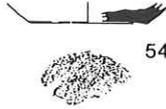
51



52



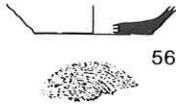
53



54



55



56

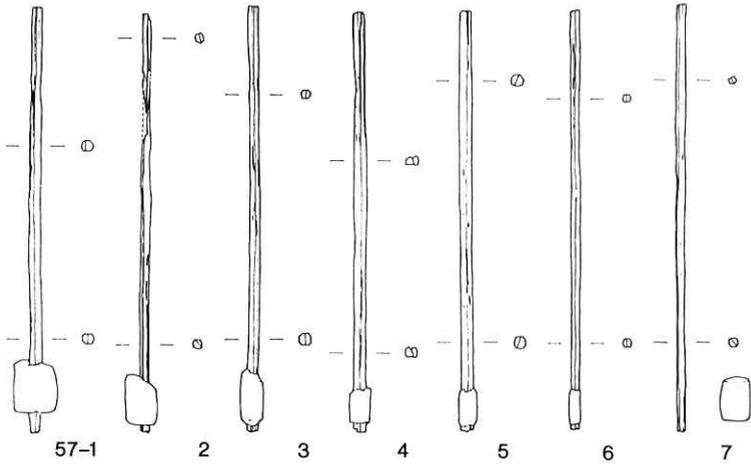
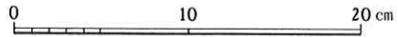


図99 1号経塚出土遺物

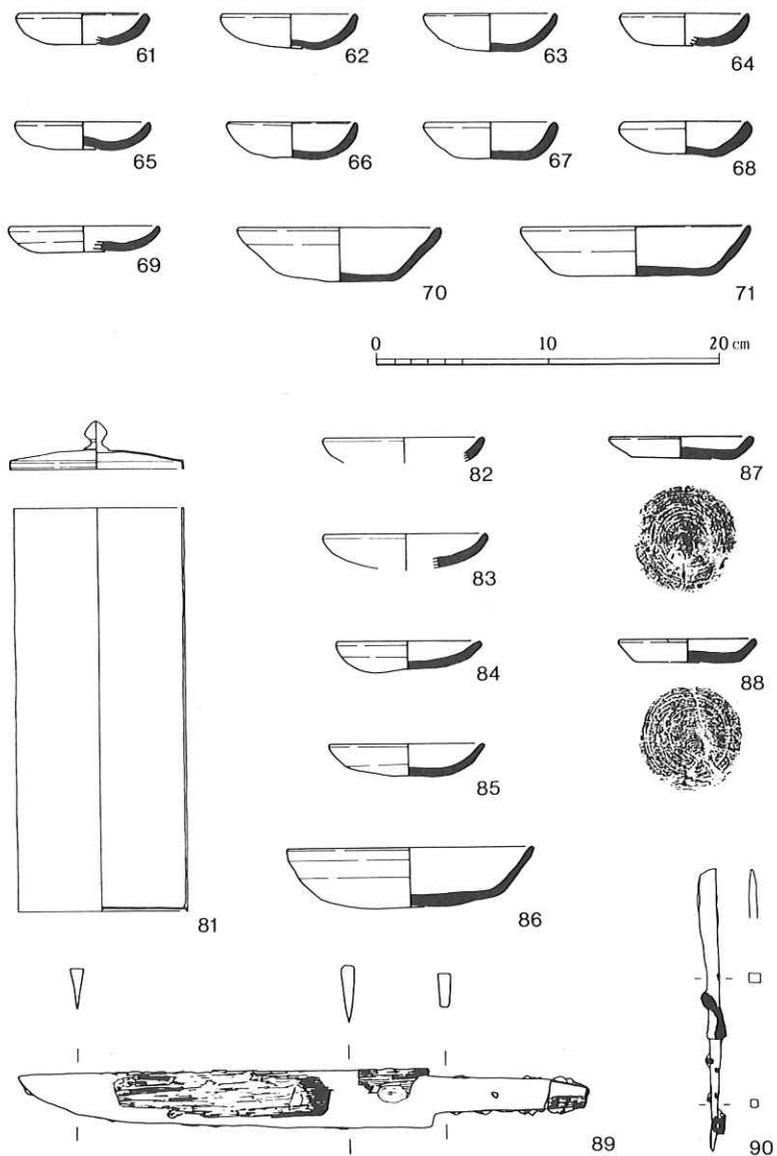


図100 2号経塚出土遺物

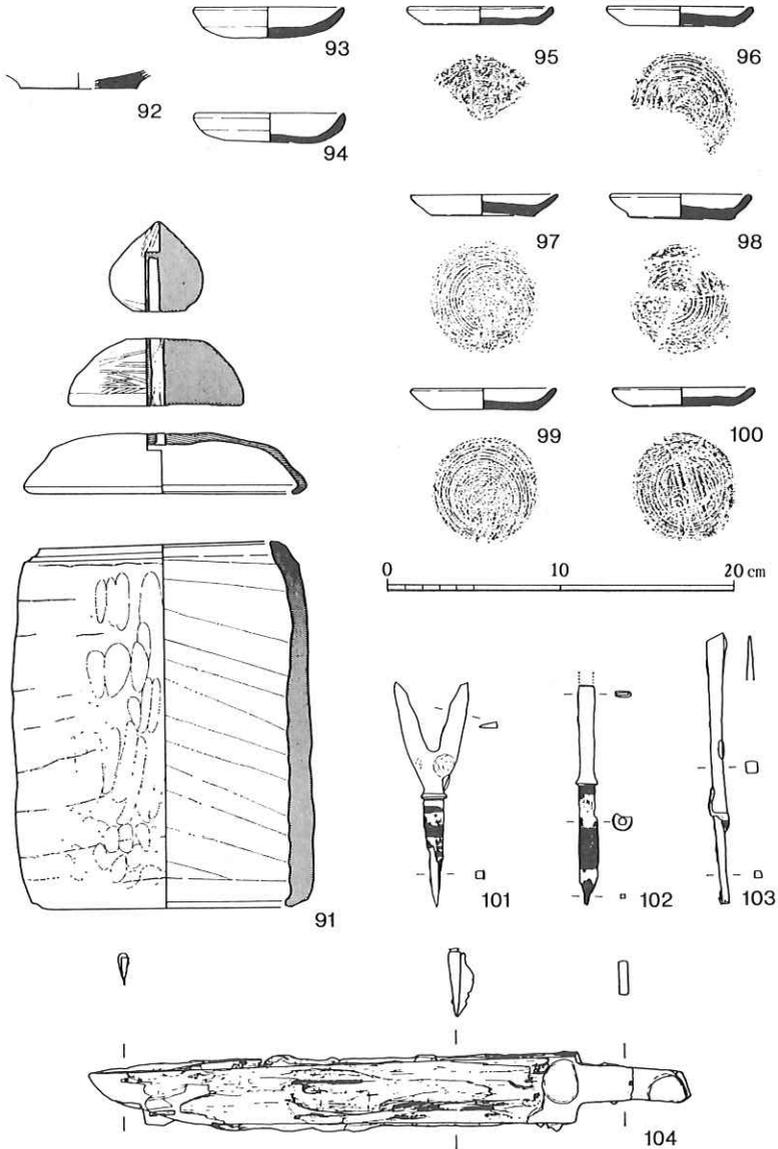


図101 3号経塚出土遺物

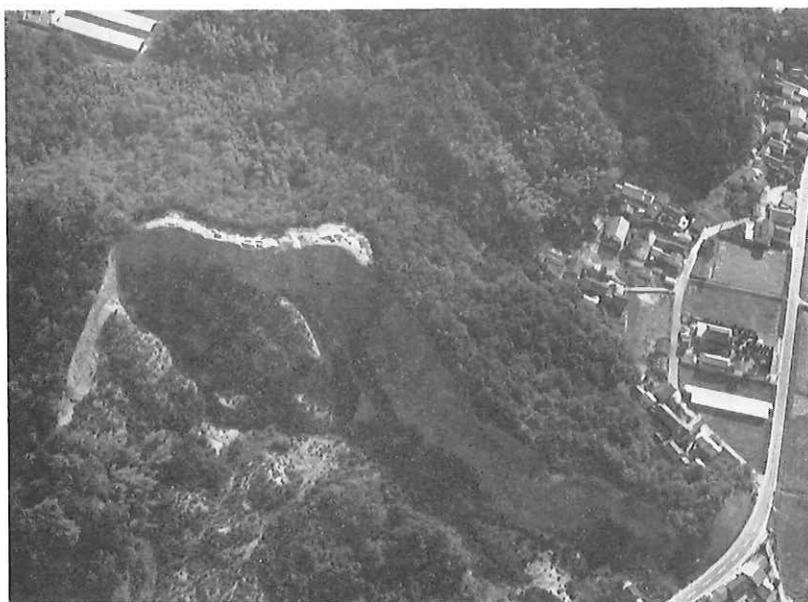


写真35 (上) 田多地小谷遺跡遠望 (丘陵中央部) (下) 空から見た小谷遺跡

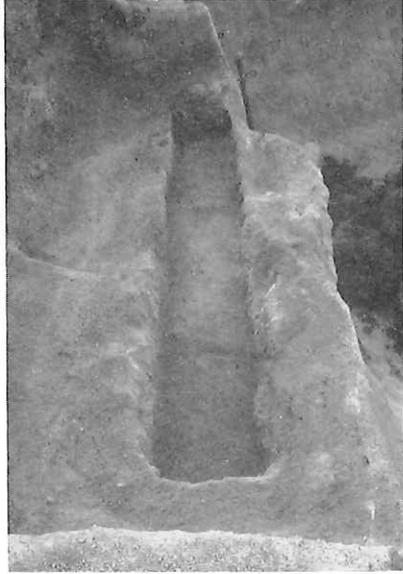


写真36 (左上) 3号墳第2主体
(左下) 3号墳第5主体

(右上) 6号墳第2主体
(右下) 3号墳第6主体



写真37 (上) 3号墳第4主体
(下) 5号墳第2～5主体

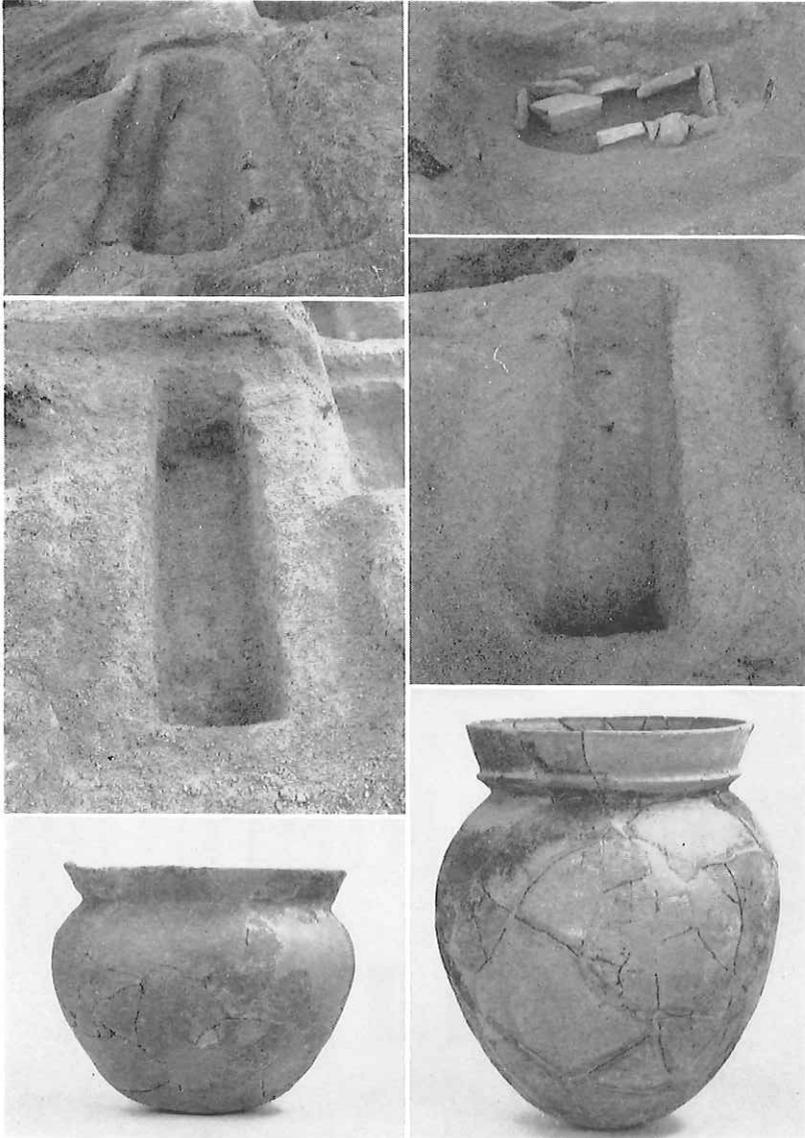


写真38 (左上) 3号墳第14主体
(左中) 5号墳第1主体
(左下) 3号墳第4主体出土甕

(右上) 4号墳第4主体
(右中) 5号墳第8主体
(右下) 3号墳第4主体出土壺

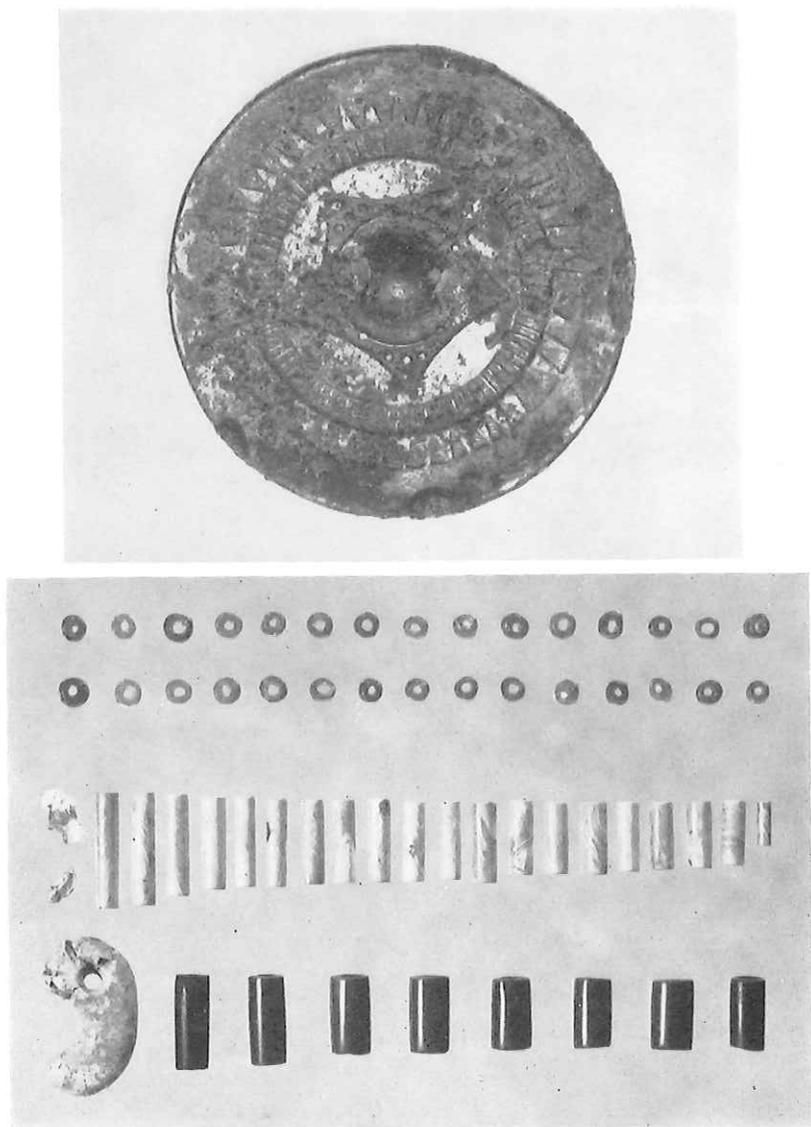


写真39 (上) 3号墳第1主体出土内行花文鏡
(下) 田多地3～5号墳出土玉類

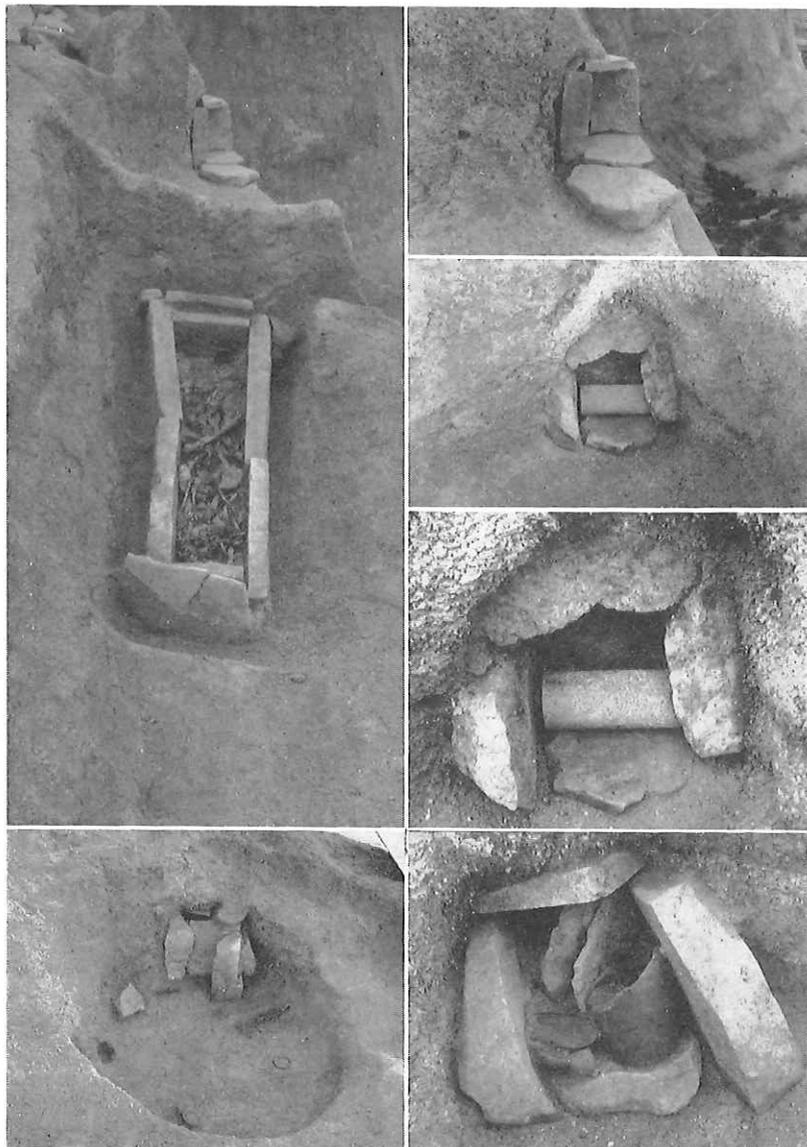


写真40 (左上) 3号墳第3主体と1号経塚
(左下) 3号経塚横口式小石室閉塞
状況

(右上) 1号経塚小石室
(右中2枚) 2号経塚経筒埋納状況
(右下) 3号経塚経筒埋納状況

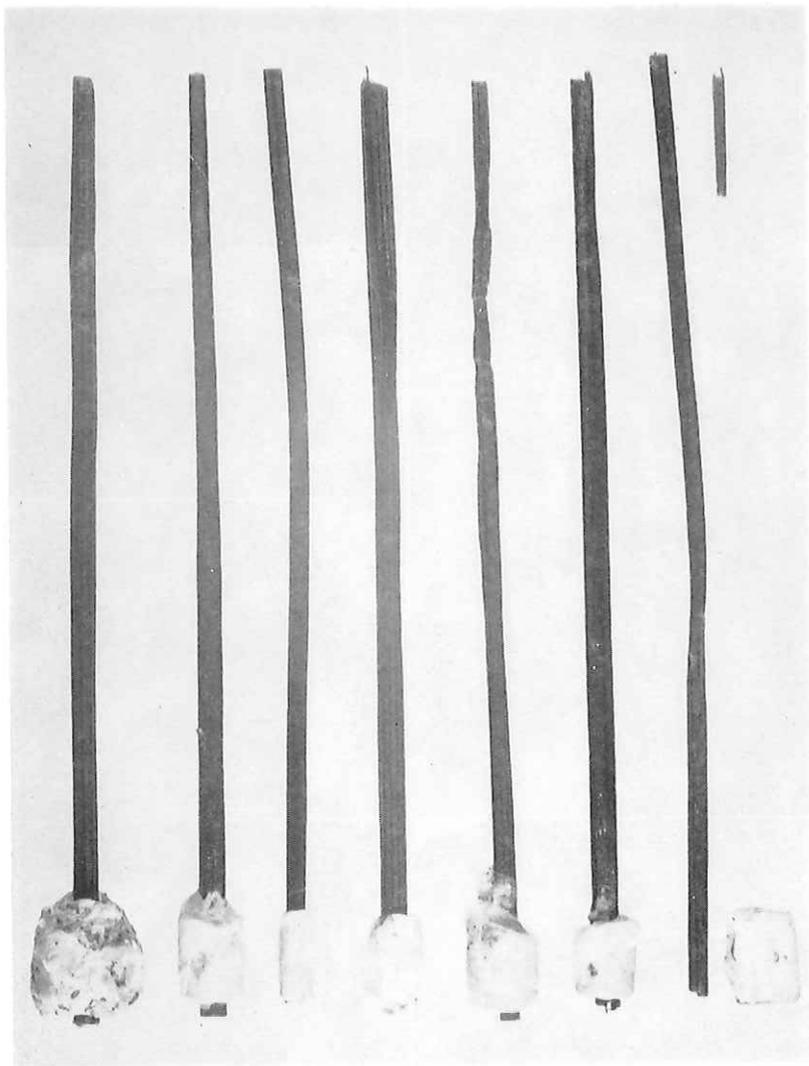


写真41 1号経塚出土経卷

17 寺坂の古墳

所在地 出石町寺坂、1907年(明治40)4月25日付、出石町寺坂、長島五郎氏が養父郡八鹿村(八鹿町)寺坂在住の永田尚奥氏にあてた書面が但馬史

注料22に記されている。

表書には、

「拜啓 時下春暖の候とは申せども—(中略)—本日豊岡中学校教頭堀内氏外木村ヨリ古田氏ノ来寺あり、古塚発掘仕り候処、左記のもの発見仕り候間乱筆を以て御通知迄」

として、出土遺物を図示し、説明を加えている(図103・104)。

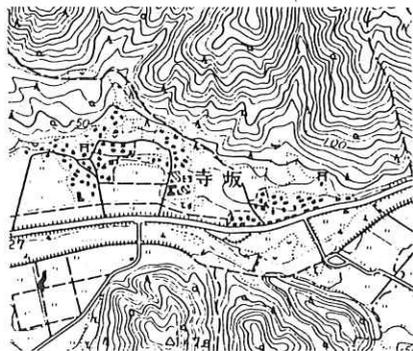


図102 寺坂周辺の地形

古墳の形等については、史料からでは推察することが容易ではなく、石室の形、墳形など不明である(図102)。

出土遺物は石室のどこから出土したのか不明な点が多いが、玉類として、水晶製の切子玉(1)、瑪瑙製の勾玉(1)、青石製の勾玉(2)、4号勾玉(1)、土師器の碗、須恵器の有蓋三足壺(1)、自然釉のかかった須恵器製長頸壺(1)、多数の刀類が出土。また、以前に掘り出したものとして、須恵器製の蓋と身であろうか一対出土している。

明治時代に行われた古墳の調査であるため、その具体的な内容については不明な点が多いけれども明治時代の発掘調査の様子を知る貴重な資料といえる。

注. 桜井勉編集「但馬史料22」

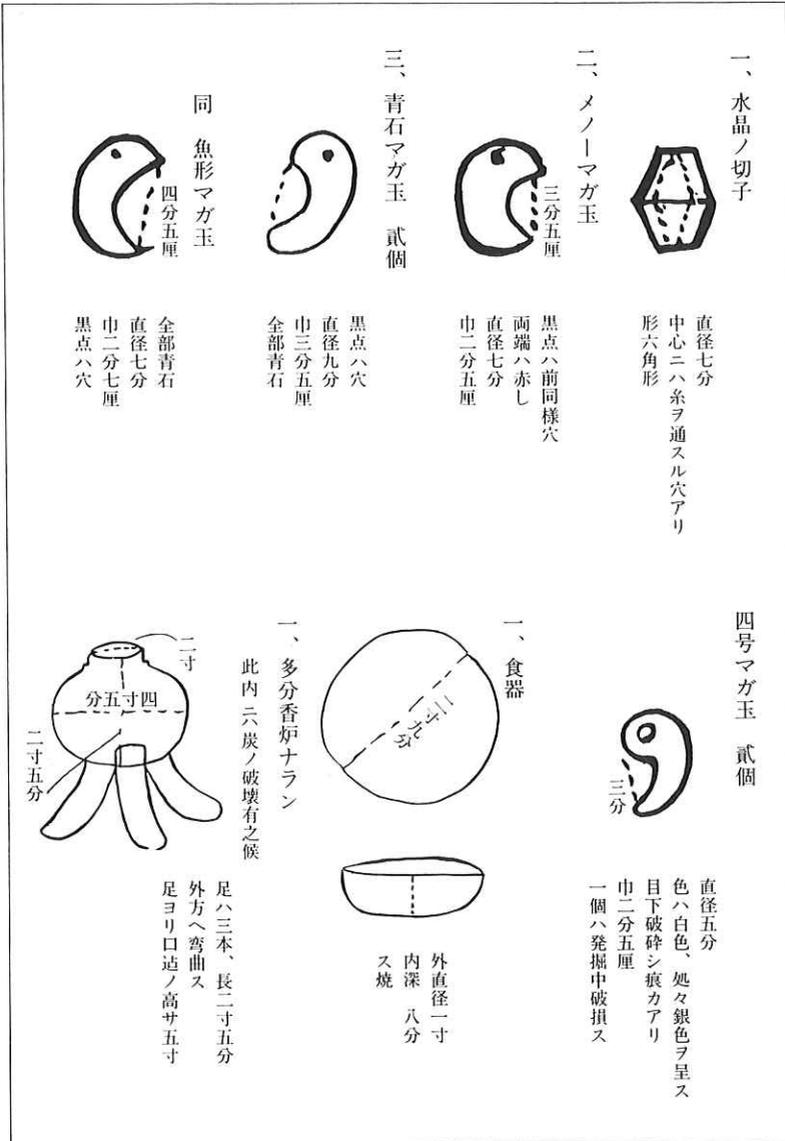


図103 書面に描かれた出土遺物(1)

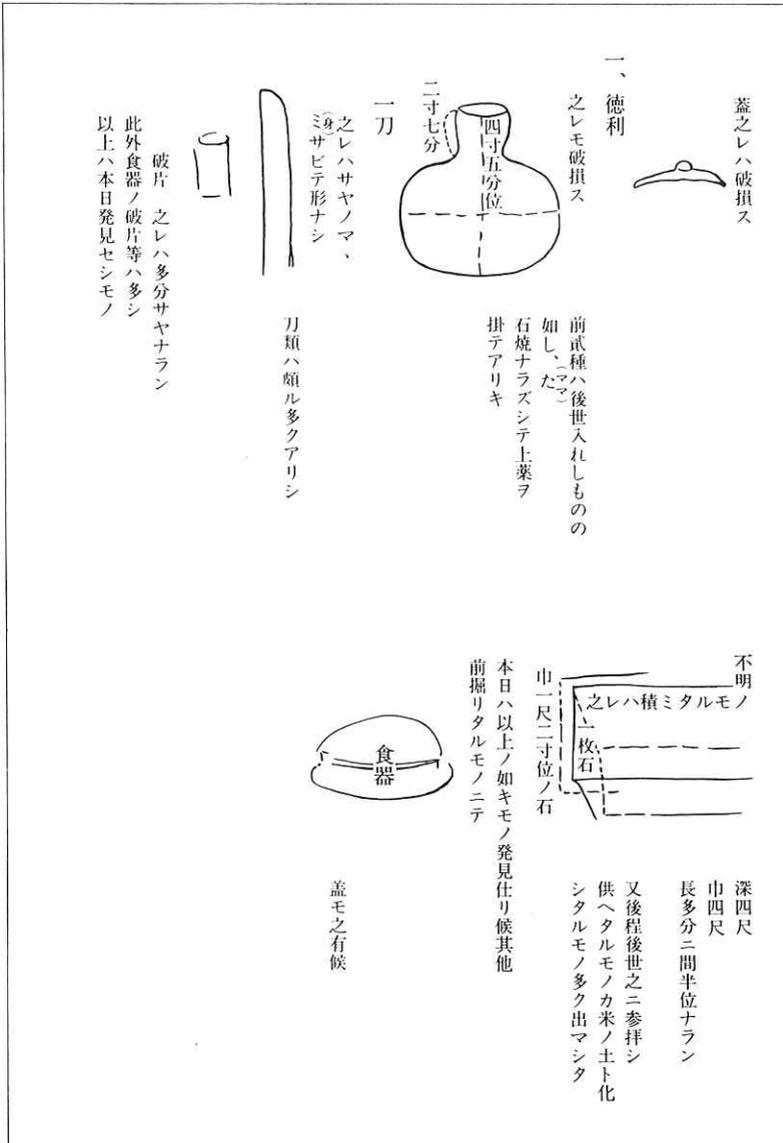


図104 書面に描かれた出土遺物(2)

18 寺坂1号墳

所在地 寺坂小字ペライ若一王子神社の西側に続く丘陵上に位置する(図105)。

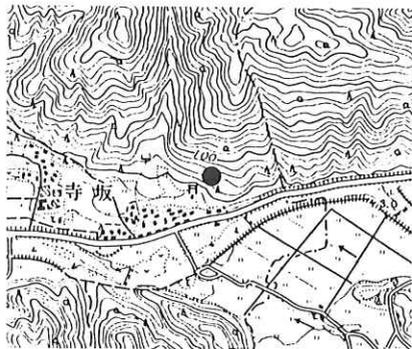


図105 位置図

注
出石高校に1点保管されている。

遺物

つきみ

杯身(図106)

杯身は椀状を呈するもので、器高は低く、口縁部と体部との境界は明瞭ではない。口縁部はヨコナデ、体部はナデ、底部はへら切り未調整である。内面はナデを施している。口径9.8cm、器高3.5cmをはかる。胎土は精選された粘土を使用、焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。

製作年代は7世紀前半と思われる。恐らく副葬品として使われていたものであろう。

注、出石高校郷土史研究会「以都之」II 1950年

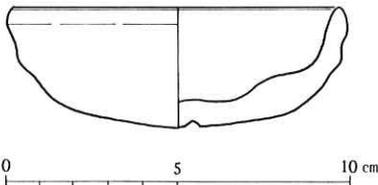


図106 杯身

昭和20年代にはすでに盗掘が行われ、古墳の石材は他所へ運び出され消滅した。

古墳は円墳であり、径10m、高さ約1~3.5mをはかる。埴輪等は出土していない。

石室は無袖式の横穴式石室で、その細部については不明である。

遺物は刀、須恵器等が多数出土したと伝えられる。その内杯身が

19 榎見古墳

所在地 出石町内から南西に深く、奥山川によって刻まれた谷間の地に、中村、榎見、和屋、奥山の集落が点在する。その中で榎見は伊津師神社を中心にして、奥山川と榎見川とが合流する扇状地に位置する集落である(図107)。かつて古墳は5基群

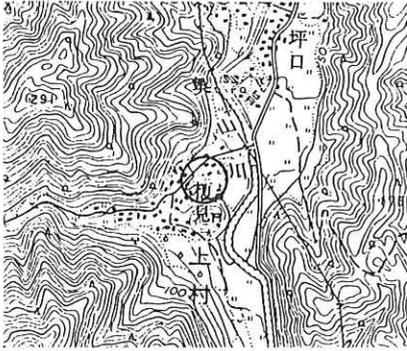


図107 位置図

在していた。内1基は消滅し、残りの4基は封土もなくなり、横穴式石室も崩壊してしまっている。現在、桑畑の中に一番南に位置する榎見古墳がある。出石神社に須恵器の短頸壺片が湯口孝春氏により昭和50年代に奉納されている。

その器面には、「出石町榎見、五ツ古墳の内の最下手古墳より出土、榎見、湯口孝春、奉納」と記されている。

遺物

短頸壺 (図108)

短い口縁部が内湾ぎみに直立する短頸壺である。底部が欠失している。体部の最大幅が頸部近くにあるためやや形の張った器形となっている。

体部の器面調整はカキ目を施し、その他は無文である。口唇部はヨコナデを行っている。復原口径8.4cm、復原器高9.8cmをはかる。胎土は非常に

精選された粘土を使用し、焼成は堅牢、色調は灰色を呈する。

製作年代は6世紀後半に求められる。

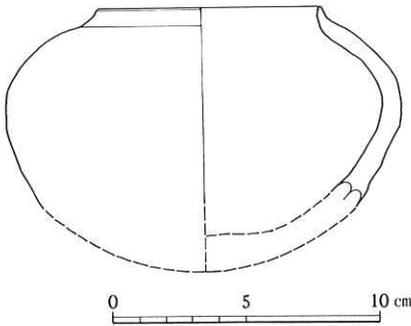


図108 短頸壺

20 塚ヶ谷1号墳

所在地 細見字塚ヶ谷、北斜面につくられた田の上方に位置する(図109)。塚ヶ谷1号墳は1967年(昭和42)ごろ、開墾にあたり完全破壊された古墳(円墳)で主体部は横穴式石室であつた。石室内から須恵器などが多数出土したと伝えられている。出石高校には「塚ヶ谷」と書かれた須恵器の高杯が保存されている。この遺物が塚ヶ谷1号墳出土のものか明らかにすることはできないが、本古墳出土のものとして理解しておきたい。

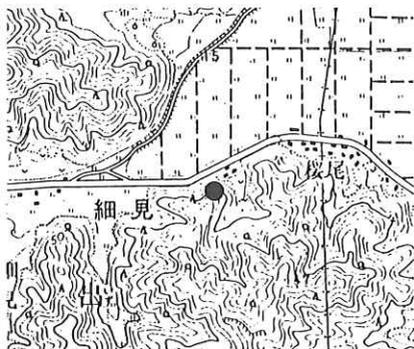


図109 位置図

付近の古墳としては、塚ヶ谷2号墳、大谷山頂古墳群、森井山頂古墳群などがある。

遺物

有蓋高杯(図110)

有蓋高杯(図110)

杯部の立ち上がりはやや内傾して、受け部は水平に外方にのび、全体として扁平な器形となっている。脚部は外へ大きく広がるもので、透かし穴はない。脚端部は丸く肥厚している。器面の成形は受け部底面に約2分の1回転ヘラケズリを行っている。調整にはロクロナデ、ヨコナデ、杯部内面は仕上げナデを施す。口径14.5cm、底径11.5cm、器高8.4cmをはかる。胎土には小石が含まれる。焼成は良好、色調は明灰色を呈している。

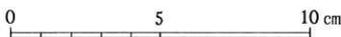
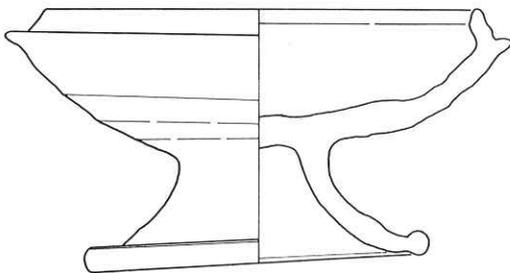


図110 高杯

有蓋高杯の製作年代は、6世紀後半と思われる。

21 下安良古墳

所在地 出石町下安良字シャガ谷に所在する。下安良古墳は、標高 30m の城山突端部の頂上に築かれた 1 墳丘内に 3 基の組み合わせ式箱式石棺を有する古墳である。この古墳に隣接するものとしては、安良古墳群、



図111 位置図

田多地古墳群、豊岡市倉見山頂古墳が点在する (図111)。

1966年 (昭和41) 4月19日、城山の突端部を建設業者が採土中に I 号棺を掘りあて、作業を中止して出石町教育委員会へ連絡がなされたが、すでにその時には消滅に近い形でしか残っていなかった。

けれども、II号棺、III号棺はその時まだ無事に残っており、4月20日兵庫県教育委員会に報告すると共に岡本久彦氏を中心にして調査が行われたものである。^注

古墳の形はすでに墳丘の東南部の封土と I 号棺が消滅しているけれども、II・III号の石棺は蓋石が露出した状態であったため墳形は著しく変形しているが、円形であったと思われる。1 墳丘に石棺を 3 基有する円墳のほぼ中央部に石棺が築かれ、III号石棺の長軸を磁北に向けて、I号、II号石棺は磁北に対して直行する位置にあり、I・II号石棺は平行して築いていた。

II号石棺 (図112)

II号石棺は磁北に直行する位置にある。組み合わせ式箱式石棺である。長側石・短側石と蓋とで構成されるこの石棺は、II号石棺においては6枚の長側石と2枚の小口側石、2枚の蓋石を用いている。そして、石棺の上をさらに板石で覆っている。底石はない。

蓋石は、板状に加工された3枚の石材を用いている。共に長辺を面取りしている。蓋石個々の大きさは、蓋石に付けられた番号からII/1は長さ85cm、幅77cm、II/2は長さ93cm、幅77cm、III/3は長さ43(56)cm、幅77cmをはかり、平均厚さ16cmである。

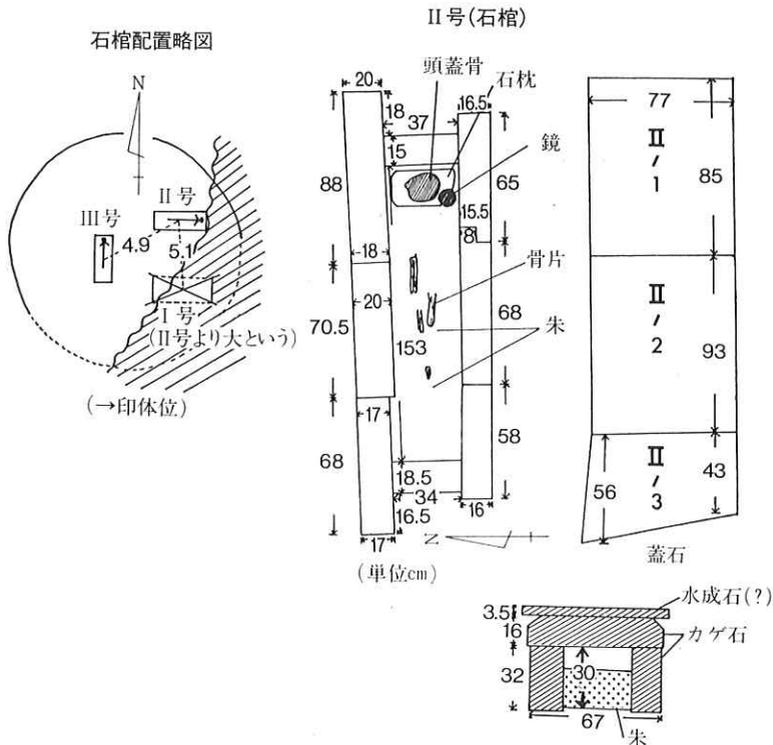


図112 外形略図とII号石棺（「下安良城山古墳調査概況」より）

蓋石の組み方は、小口の面に何も加工を施さず、蓋石と蓋石を接して置く方法を3枚共にとっている。蓋石下面、長側石、小口側石に接する面には何も加工が加えられていない。

石棺の規模は、外側では左長側石3枚で2.26m、高さ約32cm、右長側石は3枚、長さ1.91m、小口側石の幅頭部側で73.5cm、足部側67cmをはかる。石棺の内法は、長さ153cm、幅頭部側37cm、足部側34cm、棺床からの高さ30cmをはかる。

棺内には15~20cmの厚さで朱が詰められ、多量のベンガラと少量の水銀朱の混ぜられた赤色顔料が塗布されていた。

棺内の頭部小口側石に接して朱に染まった石枕が発見された。石枕の右下に変形四獣鏡（倣製鏡）が1面副葬されていた。そして、石枕には頭骨が安

置され、骨片と刀子(1)が発見された。

遺物(図114・写真42)

変形四獣鏡

朱に染まった小形の変形四獣鏡である。鏡背の鈕座には1条の圈線が巡る。4個の乳とその間に結び紐状に著しく退化した獣文を鑄出している。その外には圈線が巡り櫛歯文帯が描かれ、外区には鋸歯文帯を鑄出している。

面径12cm、鏡の反りは鏡縁部で0.3cm、厚さ0.4cmである。

4. 刀子

布に包んで副葬したらしく布片が付着している。やや内反りしている。

全長7.8cm、茎幅1.8cmをはかる。

石枕(図115-1)

石枕は、逆台形を呈し、カゲ石の上面やや楕円形のくぼみを掘り込んだものである。その規模は縦13cm、上部の幅28cm、下部の幅21cm、厚さ6.5cmをはかる。

III号石棺(図113)

III号石棺は磁北に平行し、I・II号棺とは直行する位置にある。組み合わせ式箱式石棺である。II号石棺に比べて、III号石棺の方がやや簡略化された形を呈する。長側石は左右3枚、小口側石は上下各1枚と、蓋石5~6枚によって構成され底石はない。

石棺の規模は内法では、長さ156cm、幅は足部で27cm、棺床から天井石までの高さ25cmをはかる。



写真42 変形四獣鏡

石材は軟質の切り石を使用し、石棺の内側に朱を塗布した痕跡が認められる。石棺の掘り方等については調査がおよんでいない。

石棺内からは、石枕に安置したほぼ完全な頭骨、骨片の外、鉄鏃(1)、鉄剣(2)が副葬されていた。鉄剣については調査当時散逸し、後日提出されたため埋葬位置は不明である。

遺物(図114)

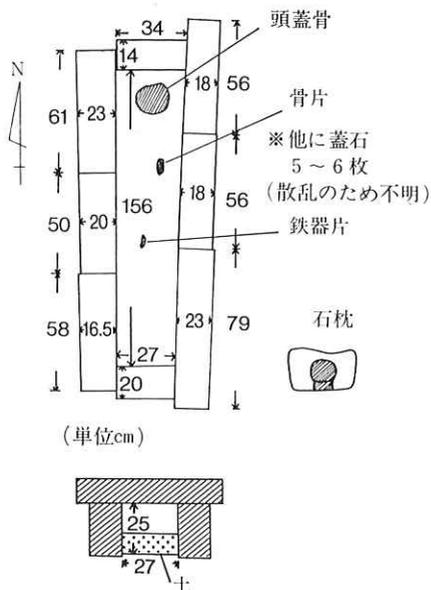


図113 III号石棺

〔下安良城山古墳調査概況〕より〕

全長 31.2 cm、刃部長さ 23.2 cm、
 茎部長さ 8.0 cm、関幅約 3.6 cm、刃部厚さ 0.5 cm、茎部厚さ 0.4 cm をはかる。

3. 鉄鍬

短い茎を有するやや長方形の鉄鍬である。先端部分は断面では山形を呈している。茎部分に木質部分が残っている。

全長 5.1 cm、茎径 0.8 cm をはかり、断面は四角形である。

石枕 (図115-2)

やや下辺の長い長方形の石枕である。豊岡市陰産のカゲ石を用い、上面に頭を置くくぼみを穿っている。その大きさは、約縦 1.8 cm、下辺 30 cm、上辺 27 cm、厚さ 10 cm をはかる。上面、側面共にノミで成形したらしく、その痕跡が明瞭に残っている。

まとめ

下安良古墳は墳丘内に 3 基の箱式石棺を埋葬する集団墓の一つである。すでにとりあげた田多地古墳群は同じ山塊に位置し、3号墳第3主体、3号墳

1. 鉄剣

片刃の剣である。鉄の腐食がはなはだしく刀形の剣なのか明確ではない。刃部の断面は菱形を呈し、茎は長方形である。

復原全長 35 cm、刃部長さ 24.2 cm、茎部長さ 10.8 cm、関幅約 3.4 cm、刃部厚さ 0.5 cm、茎部厚さ 0.4 cm をはかる。

2. 鉄剣

両刃の剣であり、茎から柄の部分にかけて柄巻きの材質が残っている。刃部は菱形を呈し、鞘にいれずに副葬したらしく木質等は付着していない。茎の断面は長方形を呈している。

全長 31.2 cm、刃部長さ 23.2 cm、

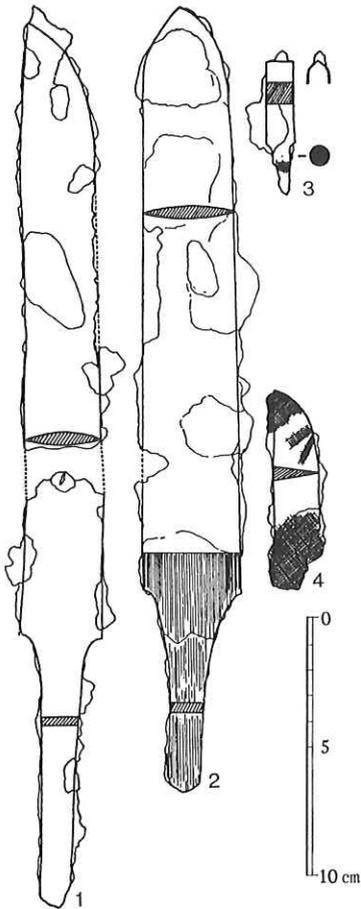


図114 鉄器

(「下安良城山古墳調査概況」より)

第5主体、3号墳第6主体、4号墳第4主体、6号墳第2主体、また、町外では豊岡市七ツ塚6・8号墳、カチャ古墳、城崎町今津稲荷裏山古墳、日高町羽根山古墳などがある。特徴として板石をH字状に組み合わせる石棺であり、棺床は見られない。副葬品の少ないことなどがあげられる。この下安良古墳もその例にもれないところから築造年代は須恵器をまだ副葬しない5世紀前半に求められる。

1967年(昭和42)3月、出石町の文化財に変形神獸鏡、石枕が指定された。また、Ⅱ・Ⅲ号石棺は家老屋敷の中庭に移されて保存されている。

注. 岡本久彦「下安良城山古墳調査概況」
『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集

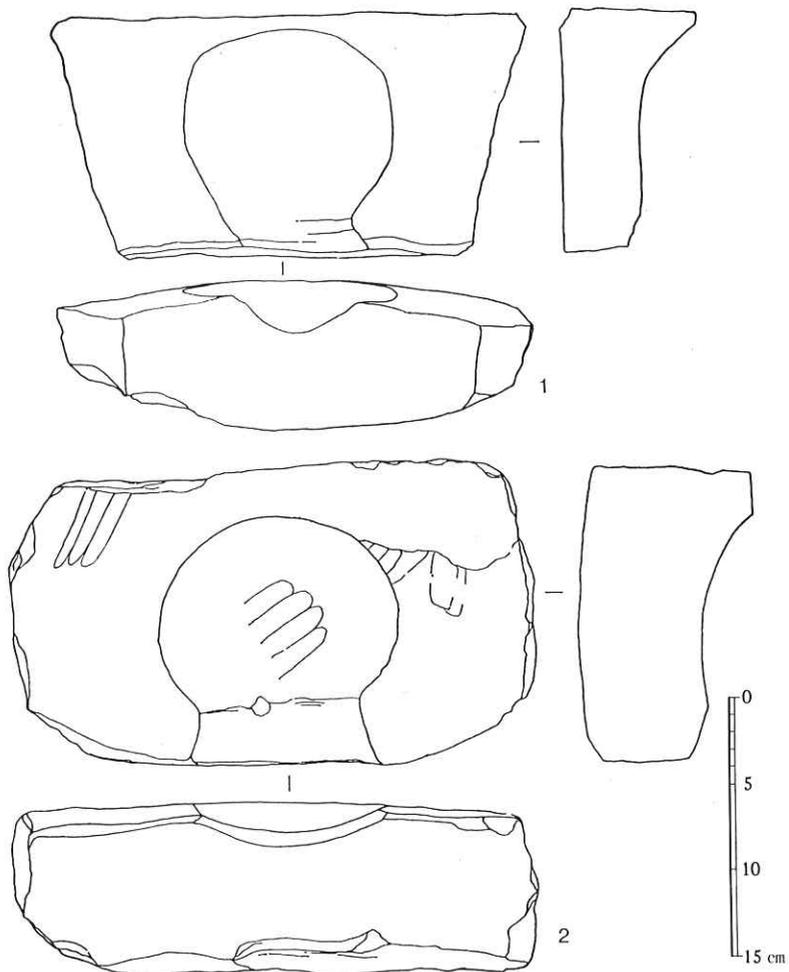


図115 石枕 (「下安良城山古墳調査概況」より)
1、Ⅱ号石棺出土 2、Ⅲ号石棺出土